

822
178 Na

眠江入楚

梅枚

32

[Faint, illegible handwriting on the left page]

[Faint, illegible handwriting on the right page]

梅枝

元九歲

太政大臣

春宮御元服可為二月明石姬文御裳著同前夏
正月廿日源氏君合薰物給夏

二月十日皇部心齋六条院給夏

檜木院送薰物於源氏給夏

瑠璃急二梅枝付

御方々合薰物在祓奉源氏皇部心齋判給夏

御方々合薰物 源氏傳延 紫上梅花 公蘇里荷葉

明石上薰衣方

終夜物音遊給夏

明朝告部心齋歸給夏

明石姬君御裳著夏

於六条院中宮御方心事

廿余日喜文御元服夏

明石姬君入内延引月夏

御調度方々御菓子夏

御方々菓子夏

源氏書菓子夏

昔の心象集六卷源氏文

宮御草子捧齋給り

人々多給文

昔の心象集古寄源海帝古葉集延茂古今集木給文

内大臣殿恩給云云厚姫文

源氏君教訓御子宰相中物給文

内大臣殿与雲居厚姫給時介自夕寄宰相中物有源文

女房有云云寄

梅枝

以別為卷名

秘卷名以別号之

何卷名蓋物合し後年状将取拍子歌梅枝梅之八條云云

秘源氏廿九正月九事

秘源氏廿九

御意云々

何明名中云々

何う不れ花給云々原云々此あり文十二キヤクキ二月上云々

何名作云々此御意云々十二歳也云々不れあり文云々

何う此中云々十二歳なり云々不れあり文云々

事云々

喜云々

秘今上也十三歳

冷泉院喜會時應和二年二月廿八日御元服

續日本紀云延暦七年二月甲子皇太子加元服其後天皇令

后並御前殿合大納言從二位兼皇太子傳及原朝長繼中

細言從三位紀朝長初与兩人手加其冠于時大貳道雅朝長

正月晦日成此正月 卷正月同時 即執笏而

云朱雀院太子今十三歳也御意云云

是又冷泉院太子例と換り

何う御意なり

何んれ姫云々の入内也

云々

多き物何の世給 （八） 葦物御合也

大貳廿多々まうまうり （六） 葦物御合也

頃下れをいつか大貳してはまうり （七） 葦物御合也

秘動物を大貳る必と調色をなす （八） 葦物御合也

江津道層れ御さや （九） 葦物御合也

河村下集云大入道及し葦物あり （十） 葦物御合也

道雅朝臣 （十一） 葦物御合也

し （十二） 葦物御合也

り （十三） 葦物御合也

あ （十四） 葦物御合也

を （十五） 葦物御合也

何物邊 （十六） 葦物御合也

秘源と河原館相 （十七） 葦物御合也

被金締 （十八） 葦物御合也

私 （十九） 葦物御合也

御らん （二十） 葦物御合也

これ （二十一） 葦物御合也

不 （二十二） 葦物御合也

二 （二十三） 葦物御合也

秘 （二十四） 葦物御合也

私 （二十五） 葦物御合也

二 （二十六） 葦物御合也

私 （二十七） 葦物御合也

送 （二十八） 葦物御合也

私 （二十九） 葦物御合也

合 （三十） 葦物御合也

送 （三十一） 葦物御合也

私 （三十二） 葦物御合也

私 （三十三） 葦物御合也

私 （三十四） 葦物御合也

私 （三十五） 葦物御合也

英私ノ著々
在冷ウノ定
在二二二
一三二二

五百并 （三十六） 葦物御合也

河鐵目 （三十七） 葦物御合也

茅山太平觀記

れとくハ三入ん小... 河本に大畧そのむとて頗不備其言著る事と展精也

写ハ誤れそぐさくとも義和菊と云説ハ比物類といふ大畧と

大そり等し書り 愚者抄そり王れい... 河海に...

小のち知し字との字に書くと其後又王と改りせり

又さうとそむと改りもりハ比物類ハ比物類といふとさり

義和と云ゆへに義和を仁明と皇元年号し二ノ方とん

裏方と侍従といふ方有り 矣 義和仁明天皇用之

御いよ... 矣 不傳男子此制の事ハ

沈 大五分 丁子 大五分 白檀 大一分 丁香 大五分或大二分加し

麝香 大一分 薑蕙 大一分 拾遺方 沉香 大五分 甲香 大五分 甘松 二分 麝香金 小五分

密和研合搗三千杵甲香以和蜜塗之令黑黃不得過之黑 此兩種方不得男耳是義和仰夏也 延喜六年二月三日

故典侍滋野直子朝在献方也 河 深也 甘シスセソノ五音通也

一説出石事也 又廂名也 河 放出

李郡王記天曆元年正月二日於大皇太后御所院拍殿西對 南放出草敷王座南小對鋪以上東廂西向北上敷四位座 又天曆元年三月九日奉駕幸朱雀院其殿裝束母屋放出南

て此格と云ふ物に越屋の中とつりおぼむことと云ふらう
と云ふ也晴のち

小田殿と云く本此の女と云ふりてらとおぼむ人とも云ふ

八条の式アハ御御なりと

秘お抄よみえり

一五式アハ 号八条文 仁明天皇才七の子母従四位下純種子
本康親王 名虎女 延元元年薨

高名薫物合也

黒方

沉香 四五 丁子 三五 甲 一五 薫 二五 樹金 二五

又侍従

鹿 四五 丁子 二五 甲 一五 廣 二五 薫 二五 杉松 二五

件二方故八条文方云

八条式アハ本康親王ハ仁明天皇才女子母後四位上滋野温
子泰儀貞主女也源氏の所也此方と云ふの方と云ふは後黒
方といはれと兼和の御いまり此の方云はるるきやうあり
つら後従ふれとと云ふあり後云れとのりくはちとつても人
ら云巧よりりくか職にりるりよりよりよりて云ふよかり
るりのる物あり八条式云ふは上の文式云ふはよありと云

ていそ御身に修くかやとのり

私云河花あか本康親王の母お遠よりて御く

いしと何とせ

河挑

いしと何とせ

何秘

あかひのありなり

秘源と云ふと日方と調合あり

さて後若と云ふことり

人か御あやふあり

秘若と云ふと源の心みれ

あまふふと云ふ人あまふふと云ふ

薫物と秘

かうこれ御く

此ノ字過て一合点 秘

矣御厨子れ

何香熏

秘

或抄云御厨子れ人のうに香熏二合下の膳よ草の香二

合と云は箱に合の皆仰極くて角なり管く但納物と

て見香熏は銀とて薫熏れ入りり香と入り二合一合

は草と納料は梅苑河系物後足音とて納但

は垂の中にし母垂るる錦物とあり

此の物とて表は海より入りり入惟茶葉二合あり

而の心とけりし人 秘 ありのされし人 秘
まじき十日ぬきし 秘

兼物とく 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

そのりり 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

兼物の文 秘 兼物の文 秘
兼物の文 秘 兼物の文 秘

梅も折枝のやうに、折れて立てえりありあり

秘 花のあふふら枝のやうに、はらり糸あよきこころ也、是方にお花雪うしとさこれの白くあまこころみとりのいふ方よあよ
とあり折よ折こころこころありあり

えんちのちのさぬる

あまの文の御し

槿系秘花

これの香はらりけし梅もとぬねとらうん神よあまもあや
秘 比合と結焼物にありひとあまれとらうんあまの神
あまもせわらぬと早下しはつたをきかこころそ神よのこ
とあまのこころ

さしとらへし枝とハ前秘花とく町もこころと早下とくよみ
ととぬねとハ折れ折れとらふれ

或津流下り前秘花とく枝よあまのこころとあれはらりはまこころ
あまの枝もとにハ折れ折れとらふれとあまのこころ
あまのこころあまのこころあまのこころ川あり
あまのこころあまのこころあまのこころ梅のこころあまのこころ折れ折れ

女は枝葉のまはきぬみさぬりしと也

秘 花のうし説おりし

再 女はうし折れ折れし

御しとらそのあまのこころ

秘 紅梅を此彦根とこも也此紙

とらぬきり

赤紅梅とらぬきりし御しとらぬきりし

あまのこころあまのこころあまのこころあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ

何事とらゆらん 秘 花の朝とあまの枝よあまのこころ

あまのこころあまのこころあまのこころ 何事とらゆらん 阿間し

あまのこころあまのこころあまのこころ

御しとらぬきりし 秘 源氏物語の次しとらぬきり

あまのこころあまのこころあまのこころ

秘 花のうし折れ折れし 何事とらゆらん 阿間し

あまのこころあまのこころあまのこころ

梅もあまのこころあまのこころあまのこころ

幼章朝古之埋五葉松下春秋七日夏五日十月十日

必或抄云女院より系承りたる瑠璃丸念二の中六公系付瑠璃丸
又葉枝白ふき梅と云りてとらり萱花と云りてとらり梅と
あはれ梅丸の梅のふもむは葉枝下に埋と云れとらり今思言
とふ字とてとらり梅と云れとらり梅と云れとらり梅と云れ
是と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り
りれはなれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り
り梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り
あはれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りて
是はとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りて
ねと云と陳八の言也ひ言系院ももあはれと云りてとらり梅
出かこれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り
惟光此宰相なり
秘 惟光系院おはれとらり梅と云りてとらり梅と云り
何 任系院の教道其門七ヶ圃受領合括之史勘云文了祥系院
惟光前相律守也

昔染乃そり 秘し女に童とてとらり梅と云り

いとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

あはれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

おはれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

と各家おはれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

ともありせぬとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

いつとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

女院此御ら梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

まこととはいつとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

正言の御ら梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

梅後とらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

あはれとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

秘 梅花と加てとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り
何 御ら梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云りてとらり梅と云り

梅花言

沉香 八五二分 白唐 一分二朱 甲香 三五二分 甘松 一分
 白檀 三五二分 丁子 二五二分 广香 二分二朱

已上小十五五之分と云ふは思言侍候外に如らぬもの
 なるはいとそくつりたるは事とい 寛教侍候の鏡書に
 丁子加増と云ふは思言侍候の香と云ふはこれなり
 こは思言侍候の梅の花の香なり

必すといふは思言侍候の八宗文式に思言侍候の梅の花と云ふは
 此の二の百八不傳留と云ふは思言侍候の梅の花と云ふは
 梅の花の香と云ふは思言侍候の梅の花と云ふは
 寛教侍候の鏡書に思言侍候の梅の花と云ふは
 こは思言侍候の梅の花の香なり

荷葉方

甘松 一分 沉 一五二分 甲 二五二分 白檀 二朱一朱 麝香 二分代廉射
 藿香 四朱或二朱 丁子 二五二分 或安息香 一分一沉二五二分
 天慶六年二月廿一日 甲午 公忠朝臣不昧之

此れは思言侍候の梅の花の香なり
 此れは思言侍候の梅の花の香なり
 此れは思言侍候の梅の花の香なり
 此れは思言侍候の梅の花の香なり

菱ハ荷葉方 必す里上菱御方合之 秋ハ菊花方又侍從
 冬ハ落葉又黒方也 寛教大僧都説云春之丁子菱秋之沉
 冬之薑陸随季三銖三斗可加也 合香古方也

秘 梅花荷葉菊花落葉方と云ふは思言侍候の梅の花の香なり
 と云ふは思言侍候の梅の花の香なり
 私云明石上ハ思言侍候の梅の花の香なり

凡為及公自以此... 薫衣香

秘 凡為及公自以此... 薫衣香

秘 凡為及公自以此... 薫衣香

二種と明石上合を... 薫衣香

何千金翼言云 薫衣香方

- 藿香 八兩 覽探 各三兩 甲香 二兩 蒼唐 五兩 青桂皮 九兩
料理畧之 沉香 三五兩 甲 一五二分 白檀 二分 青木香 二分 丁子 一兩
占 一分二兩 齋 已上大

凡香附子代以鷄舌香若華代被艾納香青木香代白檀

件方故式部心親王上
又方一名體身香

丁香 藿香 零陵 青木 甘松 各三兩
白芷 當歸 桂心 檉榔 各一兩 麝香 一分

右十物細搗絹篩乃粉以蜜和搗一千杵之後出之丸如棗核口含咽汁盡一夜三日別含十二丸當自覺口舌五日自覺體香十日夜被亦香廿日送風行他人聞香廿五日洗手面水落地香一月已後抱兒之亦香忌蒜及五辛木非但口香體望而已蓋亦治万病一方有香附子一兩

兼和百步香方

甲香 小八兩 藿香 小一兩 占唐 小一兩 白檀 小八兩 零陵香 小八兩 藿香 小
甘松花 小五兩 乳及香 小五兩 白膠 小五兩 麝香 小五兩 麝 小二兩

右十一種搗蜜和之於瓷器中盛埋經三七日取燒百步之

外同香 件方出自四糸大約言家大江千古所上耳

沉 小四兩 廣 小二兩 甲 小一兩 甘 小一分 三朱 參 小一分 三朱
又 沉 小四兩 廣 小二兩 甲 小一兩 甘 小一分 三朱 參 小一分 三朱

已上朱萑院御方也

薰衣香 一名黑方也

沉 大四兩 丁子 大二兩 甲 大一兩 二分 薰 大一兩 廣 右二分

百和合 字侍從

沉 四兩 丁子 二兩 甲 一兩 已上大 金 一兩 甘 一兩

已上仁和元年三月四日抄之增換

今集朱萑院之御方也仍之記

朱萑院之寬平御方也仍之記

乙忠朝長号滋野井并右大弁從四位下天仁二年十月廿八

日卒也 光孝天皇御時大慈以回紀言名薰物舍好手也

延壽天慶之間右大弁乙忠朝長慈人所小舍人大和常生相

並奉合香之役

矣前朱萑院集平此御門之御方也仍之記

とほくしあやうしに 甚るる百歩あやうしたる物
極うりりて又よるれゆりし也
いつ建しとてしとてあはれ
何不無誣し

昔昔部宮交いつ建しとてしとてあはれゆりし
くしとて何建しとてしとてあはれゆりし
心きとれよらんこふりり
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし

月さし出ぬまじの
何甚るる百歩あやうしたる物
中り今月新の二月末初九日法甚るる百歩あやうしたる物
正上初十日とてしとてあはれゆりし

ふしとてあはれゆりし
何甚るる百歩あやうしたる物
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

あはれゆりし
秘傳の何建しとてしとてあはれゆりし
あはれゆりし

當の事々としてくれ 二段 喜うけく鳴くまゝいさかきあふりつゝ
あられそこよりやあふりけり

契はあふりて事れ老るれ思ふ方より羽よ竹奇と初よそふ
んとしゆく号とれび思取り

私に事々名けり事 桐壺書々 祿く 毛詩名篇例立也
しつゝおんあふりて此の時高あふり

必しあふり事々あふり 齊
秘年れあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
しつゝあふり事々あふり 紅梅大長

あふり事々あふり 必助音れり

當れあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
必しあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

子をせし給ふべし

あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

私に事々名けり事 桐壺書々 祿く 毛詩名篇例立也
しつゝおんあふりて此の時高あふり

あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

あふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ
秘催るあふり事と流し ころ草子地 思ふ人 鄂曲とくれあ

月夜にあらはるる花さくらなり

玉風りふふふとてらぬ花と吹やうらうらとてらぬ月夜に

将らう横笛吹きとてらぬ月夜に

なまけあやめ 秘くはむらさき信ありとてらぬ月夜に

月の光をてらぬ月夜に

赤の月と花と吹やうらうらとてらぬ月夜に

或説をたれは花のちとてらぬ月夜に

くらあはれは花とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

まこと花をてらぬ月夜に

矢も月朝にけにぬ花のちとてらぬ月夜に

花のちとてらぬ月夜に

秘夜中あらはるる花とてらぬ月夜に

ゆらゆらとてらぬ月夜に

秘は月夜に

うらうらとてらぬ月夜に

雨のちとてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

花のちとてらぬ月夜に

秘は月夜に

花のちとてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

とてらぬ月夜に

いづれも一多りやしてらるひは ち若し一り

秘 ち若し一りやしてらるひは ち若し一り

御車に御りてはとひさく 車庫よりに半とく御り

又車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

秘 車に半とくもの二に 稱名院車に半とく御り

と文自筆
巻云小方ハ
若菜也
定まりハ
時ハ小方ト云
キナナト云

屋 一ととゆりおとハ 秘と云ふとく御り極上
りつしと事にお言ふひの 一とと云ふとく御り極上
りつしと事にお言ふひの 一とと云ふとく御り極上

契 ち乃下れるあれハ 秘と云ふとく御り極上

源氏の事とせら 秘と云ふとく御り極上

カハハとあそび 秘と云ふとく御り極上

或御鏡よ 秘と云ふとく御り極上

ひれの輝と 秘と云ふとく御り極上

名とあそび 秘と云ふとく御り極上

詩のつらんよ 秘と云ふとく御り極上

てくもやうに 秘と云ふとく御り極上

秘と云ふとく御り極上

私案くちつしと 秘と云ふとく御り極上

秘と云ふとく御り極上

秘と云ふとく御り極上

あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに
うして取口人も尋らんといつのやうかへ一ふり
一取れこれし海もふり紀事とそなつたありか
秘抄にふり家とふり紀人としひくあらぬ
是はうとせしめて取とつて取らぬあり
う取や取の神と源の後のつるも必志とらぬ
文は取の取と源の後のつるも必志とらぬ
う取の取と源の後のつるも必志とらぬ
う取の取と源の後のつるも必志とらぬ
う取の取と源の後のつるも必志とらぬ

いしつうつり
あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに

はあつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに

いぬれ時 蕙酒合れまうり日二月十一日あり

まのふり 海とありこれれらいつく 秘中交し 再

あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに
御く 阿久れ内侍 何 高表の時表とあけらあり

一動之内侍りく人れと役とつてはあり

うとこれれいぐ中交し 御く 阿久れ内侍
御く 阿久れ内侍 何 高表の時表とあけらあり

あり 一とありこれれいぐ中交し 御く 阿久れ内侍

あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに
今まこれいぐ中交し 御く 阿久れ内侍

後れせりあり 秘中交し 御く 阿久れ内侍

あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに
あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに

あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに
あつたれどもあれいのやとらんとあそつてこれに

ふまに後代中の例ありて中しく源の宮ふよつて針
歌なりしとて中しくありれぬつてとてふ

宮の事ありし御事ありし 中文代出御し御事あり

御事ありし御事ありし 秘源の事ありしに御事ありし

御事ありし御事ありし 中文代出御し御事ありしなり

御事ありし御事ありし 秘ありし御事ありし

御事ありし御事ありし 源の事を御事ありしなり

御事ありし御事ありし 秘紫衣御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

御事ありし御事ありし 秘大の御事ありし

交つてこれより八町と云ふ中に 後の宮へ入内さ

ていふとこれ中に何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
其れよりこれよりと云ふ此れ無き 其れよりこの朝

不還迹也と云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無き云御門此朝たふん何れと云ふ事

と云ふ事と云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
御衆りのむね 何れ無き入内延引と云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
此れ無き入内と云ふ事と云ふ事と云ふ事

源氏此宮ふと云ふて先たたれ女入内なり
まゝいふと云ふ事と云ふ事 藤原殿女御梅枝たたれ女と云ふ

これ御りと云ふ 何れこれ無きと云ふ事
芳れ御りとの并たたれと云ふ事 何れ無き入内延引と云ふ事

何れ無き入内延引と云ふ事 何れ無き入内延引と云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事
何れこれ無きと云ふ此れ何れも色香無れどもあつたそつと云ふ事

秘
源氏物語の源氏

今此世の假名ハ弘法大師始作之以前之假名ハ如日本紀万葉
何木去極日本紀假名ハ色去之万葉集ハ音与訓義書之

江談云天仁二年八月日向小一條亭言謬之時 問云假名
手何何時始起乎又何人所作哉 答云弘法大師御化
件莫無所見但大后自筆假名法苑經傳借養之時被行御八講
之師南北英才相逆為爭師言名法苑經傳木之軍各振富樓
那之弁才之後源信俊都又勒此更說云日本國誠雖如來之
金言唯以假名可奉言也弘法大師云傳傳習諸真言梵字悉
曇木密法之后寄四教門法門作イロハニホヘトノ讚ヲ給
以來一切法門聖教史書經傳不離此讚文字イロハニノ字
色白云心也不說他更只以更令講人々皆驚耳之由所傳聞
古人日記中在此更者 又問云然者件弘法大師御時以往
無假名否日本記中假名在之由互外全見如何 答云此更
尤理也雖然只付倭言令書也イロハニホヘト者彼時始云
一説イロハニ有三段イロハニホヘト十リ又ル才 奈良護命
僧正作也

ワカヨタレヨリ 上ニモセスニテ 弘法大師作 京 傳教大師作或ハ
慈覺大師作也

又云イロハト者母之名也然者梵字之字母ノ歟也

往古和漢至万葉書日本記之哥ノ極書ケル也

掌中曆云高名能書 澁哉天皇 弘法大師 敏行少將

美材 大内記 前中書王 兼明 道風 木二双 依理大貳

後中書王 具平 行成 侍從大納言

あり記ありといふこと 傳あり 秘 じり 八三の草あり

あり記ありといふこと ありて 秘 ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて ありて

女心とんいましく
わうふれ物後云び書きられぬ
不としそおこころの女心とんいれぬ
あやとんいれぬ
わうふれ物

中文此母とんあも
秘 妹好乃母云来れ御息所也

らふににありししとんや
矣多むかむれ(一)言(一)割(一)位(一)多(一)記(一)事(一)

らふとんいれ御名も
わうれも後云とんいれぬ

らふとんいれ
秘 御息所を物一記るふら物一也(一)

らふとんいれ
秘 身をとんいれぬ(一)わう(一)ふ(一)れ(一)ぬ(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

中文此母とんあも
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

秘 花名(一)後(一)物(一)と(一)ん(一)

魂乃内納の(一)と(一)ん(一)今(一)れ(一)を(一)乃(一)と(一)ん(一)に(一)

らふとんいれ
秘 好中(一)文(一)と(一)ん(一)

秘 勝月(一)秋(一)と(一)ん(一)世(一)れ(一)と(一)

あまのりやわらまきくもせそくひあり

何れり建てはかたもきくもの神を或はうれすらんれ

ゆり穿れさうありんもせく正神ありぬすおの出来さうゆり

こゝろも彼そんや

秘 勝月夜

こゝろもいねをささく今世のありんかともきく

前集巻し 新うがれ無流

うにこそそ

秘 ひあし

玉ひ一服をささくし 流り流りすし 初てそくの初を紫上と意

私ひこ人あ時をいれり流りし流りし流りし

ひるさくもさくせくや 秘 紫上の初

まもいひくやといひ教りし入るる流りし初と初と

いさくまきくし流り

秘 流の初との悟りのあそと

或上より流りあそとやいふあけりり いさく同義

あそとより流りこれ じく流りあけり

まんのものさかんぬり流りあそとやいふあけりし

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

紫し去るの字はうて定まれば子孫の假名ありくあめん

紫の流り字はうてまきとる

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

紫し去るの字はうて定まれば子孫の假名あり

まきくぬさうしとむはりらうる事ありしれ初りあや

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

或は若子若し入る事紐あり 紫之次下にかうんれ

流りしあけりし流りしとみさあり流りしあけりし若子

流りしあけりし流りしとみさあり

何れ者いふ事定まて 假名かまきつひうひぬ建て後うりり

卷中二行と云外題ありて中書物もその中一冊とてあり
昔の御書は此の御書
秘昔の御書
右巻の御書不入系号并
いふに其の御書何人乎若引へたれども

あつゝ一冊ありひかくる
秘一冊
あつゝ一冊ありひかくる
秘一冊
あつゝ一冊ありひかくる
秘一冊

秘文に及奉る御書は
秘文に及奉る御書は
秘文に及奉る御書は
秘文に及奉る御書は

私に及奉る御書は
私に及奉る御書は
私に及奉る御書は
私に及奉る御書は

是の御書の御書は
是の御書の御書は
是の御書の御書は
是の御書の御書は

昔の御書は此の御書
昔の御書は此の御書
昔の御書は此の御書
昔の御書は此の御書

あつゝ一冊ありひかくる
あつゝ一冊ありひかくる
あつゝ一冊ありひかくる
あつゝ一冊ありひかくる

秘昔の御書は此の御書
秘昔の御書は此の御書
秘昔の御書は此の御書
秘昔の御書は此の御書

あつゝ一冊ありひかくる
あつゝ一冊ありひかくる
あつゝ一冊ありひかくる
あつゝ一冊ありひかくる

まいのちんねお 秘 菫花のしせのふあくの例とらり奇
ふさうりさうあさみより 之月集 花は月娘の
しるれしたれも女てと しる 花の女は今の世の僧
うれたいゆき字え

山ありもあささう 之月集 白氏文集より
いふそやあささういふそや 云 御前ふさうの二

くらひ 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや
きうけ 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

し 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや
ま 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

ち 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや
ら 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

秘 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや
白 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

私 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや
若 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

御 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

給 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

所 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

これ 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

又 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

打 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

つ 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

彼 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

多 三人 女房ふさういふそや 三人 女房ふさういふそや

中書集

人中心の記さるる海の芝草の如く此れを記すれば
至獲麟之一句ハ是と云人中心の如く此れを記すれば
人中心の感さるる海の芝草の如く此れを記すれば
只紋如の筆跡と云く自然の感懐と云く此れを記すれば
まこと此れんやれと云く

何紙屋 色紙

これらも此れを記すれば自然の感懐と云く此れを記すれば

何文字に志の草此と云く志ハ草帯して人れを記すれば
何草草ハ一なる神なりと云く此れを記すれば
張芝字伯英善草書絶妙時人謂曰臨池木盡黑後漢書仍張
生草垂ト号フル也

志と云く此れを記すれば
いささか此れを記すれば
あいなさき此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

忘るるを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

何書極なりと云く

何院乃か此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

何文字極石

此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

何興感ケレタテ 日本紀

此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば
此れを記すれば

うふふふふふふふふ 一日ハ葦の物れ批判のつるふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
何 續紙巻物

御子れ竹笠して 秘 昔部心文此御子

文一しふふふふ 常れかんとしりふふふふ

後海舟のふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
私云ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
厚しふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
又或抄に古万葉集のふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
私云古ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

何 万葉集廿卷聖武御代撰之 或説古万葉抄五卷貫之撰之是
以後乃撰也

凡 万葉集一巻廿卷平城天皇詔侍從撰之見古今序又万葉抄

五巻一説貫之撰一説梨葉人抄之同古事抄不知撰者
此外後海舟撰四巻目錄中不見他ふふふふふふふふふふ
てふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
何 順集云天曆五年宣旨ふふふふふふふふふふふふふふ
童ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
河内椽清原元補近江椽紀時文学生源順御書所御坂上望
城也丸を少将菅原朝臣伊尹を所所の別當と云ふ也
秘 古万葉集後海天皇のふふふふふふふふふふふふふふ
始つるふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

近江乃御門中古今集と 古事記乃御代撰者

和言ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

七 唐紙也 唐紙標 綺表紙 玉軸 淡香紙紐 多ふふふふふ
矣ふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふふ

此書は源氏物語の御

秘雲乃居

あつらひ

何指

私云懐

此書は源氏物語の御

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

秘雲乃居

あつらひ

秘雲乃居

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

あつらひ

贖子罪陽右汚^テ而云孫誅^ル 文選云蕙相云孫賀子致志御
門よつとせつふ父蕙相の御子孫く其時陽凌れ朱安世
京師の大使し御門のよあせりあせりてく世奉てしや
しふふ孫賀あ世とてくふふふふくくくくくくくくくく
かひりて時^ノ致志とてしりてあ世と神とてく安世獄中
あくあくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
くひりせよをさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
武帝女 汚^ルと修りてしりて武帝怒く父子孫致志
若し誅とて汚漢とあつてあり
寛平造滅云九大將時平 先年於女夏あふ共くさ前^ノ御
或抄云基國源乃御りてくさく女と平定文うひくく御り
と時平れ御りてあつれあつてさくさくさくさくさくさく
く定文かんくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
と御りてあつてさくさくさくさくさくさくさくさくさく
時平れ御りてあつれあつてさくさくさくさくさくさく
私に^レ委細格相乃事に河海の流たり

必世継よ。大曆九御門安子中官うせ給く御致うし給うく御中に
或抄の文乃水官のさくさくさくさくさくさくさくさくさく
君はさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
始りぬさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
神文乃御りてあつれあつてさくさくさくさくさくさく
其来の世よりさくさくさくさくさくさくさくさくさく
とさくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
私云是の事明親を此後家入定後意子此書乃さくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
い給云宗九御息ありての事とんよさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
秘名ひそらさくさくさくさくさくさくさくさくさく
安物さくさくさくさくさくさくさくさくさくさくさく
或末摘花なりての事源氏乃水官をさくさくさくさく
忠とてさくさくさくさくさくさくさくさくさく

とのおひくうはし紙下りハ
其内れおのまわぬれお
空にいらり紙下りおと其と其ひくうと
紙下りいらり
玉源氏口つれぬひくう時波はたぬ
まひまぬいらりし事

あつねいらりいらり
波はたぬのまわぬいらりしと源氏
贈るいらりいらり
紙下りいらり

ゆるゆるいらりいらり
前乃事と内人おれらふら
まふあひいらりいらり
其時とあつねいらり
又内人
いらりいらりいらり

秘内大老おれら
下紙下り

いらりいらりいらり
波はたぬのまわぬいらり
いらりいらりいらり
又内人
いらりいらりいらり

秘内大老おれら
下紙下り

いらりいらりいらり
波はたぬのまわぬいらり
いらりいらりいらり
又内人
いらりいらりいらり

雲のたかみをれま
いらりいらり

あつねいらりいらり
波はたぬのまわぬいらり
いらりいらりいらり
又内人
いらりいらりいらり

秘内大老おれら
下紙下り

いらりいらりいらり
波はたぬのまわぬいらり
いらりいらりいらり
又内人
いらりいらりいらり

秘内大老おれら
下紙下り

いらりいらりいらり
波はたぬのまわぬいらり
いらりいらりいらり
又内人
いらりいらりいらり

秘内大老おれら
下紙下り

いらりいらりいらり
波はたぬのまわぬいらり
いらりいらりいらり
又内人
いらりいらりいらり

秘内大老おれら
下紙下り

秘の海やれかみよ中務文政のり聲にせり給ふかた
向といひのさ給ふ屋さといふりて此音のめり給ふ
あやし給ふり

よみ給ふ事給ふさう言われぬ
てとせのりぬ屋さかんと世の戸かうかしくとてさ給ふ
給ふさかり朝よせられさかそいひのりかへりてかへりて
なれいあこれと給ふさかへりりてさかへりてさかへり

限りしとてさ給ふさかへりてさかへりてさかへりて
あや言れさかへりてさかへりてさかへりて
とせ給ふぬさかへりてさかへりてさかへりて
秘夕音と世かみ人のさかへりてさかへりて

因中務文政事とんよらりてさかへりてさかへりて
よみ給ふ事給ふさかへりてさかへりてさかへりて
ひれとさかへりてさかへりてさかへりてさかへりて
御んよ給ふさかへりてさかへりてさかへりて
私とてさかへりてさかへりてさかへりてさかへりて

よみ給ふ事給ふさかへりてさかへりてさかへりて

あやさし給ふりてさかへりてさかへりて 共終別

秘の海やれかみよ中務文政のり聲にせり給ふかた
向といひのさ給ふ屋さかといふりて此音のめり給ふ
あやし給ふり

よみ給ふ事給ふさかへりてさかへりてさかへりて
あや言れさかへりてさかへりてさかへりて
とせ給ふぬさかへりてさかへりてさかへりて
秘夕音と世かみ人のさかへりてさかへりて

因中務文政事とんよらりてさかへりてさかへりて
よみ給ふ事給ふさかへりてさかへりてさかへりて
ひれとさかへりてさかへりてさかへりてさかへりて
御んよ給ふさかへりてさかへりてさかへりて
私とてさかへりてさかへりてさかへりてさかへりて

あやさし給ふりてさかへりてさかへりて 共終別

如
私
傾
心
不
定
也

弁花 押紙 放出 私

應從三年十二月十六日漸即位叙位執筆通後卿記曰東對
代南四間為放出母屋 并 廂東西行橫切懸翠簾副西障子立
四尺屏風南北行對座敷之簾端帖 大尺座絶廊之為乙卿座橫
切御簾前南西敷四座一枚為折政座同日時範記
御直序 東對代 放出四之間 十三日放出三之間而今夜 西面御簾格下御
副立四尺御屏風五帖小御簾前 去五尺六寸 以寄東敷菅四座
一枚為當御座南去六尺許敷同各座為執筆四座

[Faint, illegible handwriting on the left page]

[Faint, illegible handwriting on the right page]

